

事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)
代理出産を問い直す会 (代表者名: 柳原良江)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
卵子提供に関する問題を扱うドキュメンタリーフィルム上映会の開催
3. 助成額
430,000 円
4. 実施期間
2013 年 7 月 ~ 2014 年 6 月
5. 実施状況
<p style="text-align: center;"><u>日本語字幕版完成まで</u></p> <p>2013 年 7 月 12 日 - 23 日 原版制作元と著作権に関する交渉・確認 8 月 28 日 第一回企画会議 本事業の説明と役割分担について 11 月 23 日 下訳完成 12 月 22 日 字幕用データ第一版完成 1 月 4 日 字幕修正会議 1 月 15 日 - 17 日 ネイティブ・スピーカーとの内容確認 2 月 12 - 13 日 字幕修正会議 2 月 14 日 日本語字幕版完成 3 月 23 日 日本語字幕修正版完成</p> <p style="text-align: center;"><u>上映会実施</u></p> <p>2 月 22 日 第一回上映会 於 東京大学本郷キャンパス福武ホール 3 月 2 日 第二回上映会 於 久留米大学天神サテライトオフィス 3 月 24 日 第三回上映会 於 岡山大学医学部 5 月 31 日 第四回上映会 於 明治学院大学白金キャンパス 6 月 8 日 第五回上映会 於 立命館大学衣笠キャンパス</p>

本会の会員個人による小規模な上映会

- 4月9日 福岡大学
- 4月11日 西南学院大学
- 4月23日 福岡女子短期大学
- 5月20日 久留米大学
- 6月7日 埼玉医科大学
- 6月25日 東京電機大学

6. 事業成果と自己評価

目に見える成果

本事業の目的である映画の日本語版制作と、その上映会を果たすことができ、当初の目標は十分に達成できた。計画段階では6月までに都内1カ所、地方都市3カ所程度を予定していたが、結果的には市民を対象とする大規模なものだけで全5回、会員個人が学生向けに個別に開催したものも含めると、全上映回数は12回に上る。

社会的な評価として、信州毎日新聞、共同通信社が記事の中で扱っている。また依頼を受け、申請者自身が雑誌『インパクション』に本映画に関する紹介記事を執筆した。さらに現時点では報道されていないが、取材を受けたものとしては、第一回東京大学開催でTBSによる取材を、6月16日にはNHK国際部よりインタビュー取材を受けている。また制作元である米国 The Center for Bioethics and Culture のHPにて本会の日本語版制作プロジェクトについて紹介され、本助成金の成果が国際的に知られるようになっている。

本プロジェクト推進にあたっては、問題関心を共有する多くの方々が無償で関わって下さった。字幕制作にかかる作業はもちろん、上映会実施の場所や必要経費を準備して下さるなど、様々な方から多大なご協力を頂いた。そのため結果的には、予算内で十分な活動を実施することができた。

なお助成期間中の活動を通じて、本映画に関する知名度が上がり各所から依頼を受け、助成期間終了後も9月～11月までの間に、地方都市で4回、都内で1回の上映会実施が確定している。本事業の成果は、助成期間終了を持って終わるというより、むしろ事業成果が社会的に認知された現時点から、今後数年をかけてより目に見える効果をもたらすと思われる。

水面下での成果

本映画上映は、目には見えないが様々な成果をもたらしている。もっとも大きいものは、本映画上映を通じ、日本各地で共通の問題意識を持つも、学術領域の異なる研究者たちと交流を持ち、様々な視点から意見交換を行うことができた点にある。また研究者にとどま

らず、首都圏以外で活発に活動している不妊治療の専門家や当事者団体の関係者と議論をする機会を得られ、大きな知見を得る機会を得た。これらの経験により、今後の当会の活動を広げ、また本問題をより深く考察する上で、人脈的・知識的に堅牢な土台を構築できたと考えている。

ところで本映画で扱った卵子提供の問題は、あまり日常的に語られる話題ではなく、人々にとって関心の薄い話題の様に見えていたが、本事業で多くの方が積極的に関わって下さった経験からは、潜在的に、人々のこの問題に対する意識は強いことが伝わってきた。これまで卵子提供による妊娠が「科学の進歩」「不妊女性への福音」といった肯定的な言説で語られがちな現状にあつて、普段は意見を言えずにいる女性達に、自らの抱える違和感、問題、時には怒りを表現する場を提供することが出来たと考えている。

さらに興味深いことに、女性だけではなく、男性研究者たちもまた、自らの意見を表明してくれた。彼らの意見からは、これまで生殖に関する問題が「女性の問題」として括られる事で、再生産活動に男性は関与すべきではないというジェンダー役割を押しつけられ、その行為に素直な疑問を呈することを封じられていた、男性研究者たちの苛立ちが伝わってきた。この点を考えると、本事業は単に女性からのアドヴォカシーとして機能しただけでなく、男性の側にも、生殖に関するイシューを巡るジェンダー構造の抑圧から離れる場を提供するきっかけを与えたと言えるだろう。

こうして本事業は、身体に関する問題を共有する女性達のエンパワーメントとして機能した事はもちろん、男性も巻き込んだ活動となったことで、真の「ジェンダー正義」を実現する上で、より有意義な事業とすることが出来たと考えている。

謝辞

当会は、若手研究者が自主的に集い、いわば手弁当で始めた会であり、関係者は社会的な立場や組織的なバックグラウンドに欠いていることから、計画を思い立っても、応募できる助成金を探し出すにあたり困難を極めていた。一方で、いったん助成金を頂き事業を始めてからは、当初の予想に反して多くの方からの協力、また事業に対する反響を頂くことになり、本事業終了後は、問題関心を共有する一般の方から寄付金により、後続となる事業を進めている。このように、実際に始動してからの社会的反響・事業継続の要請の大きさを考えると、本事業の成功は、そもそも多くの助成金が、応募者の資格や属性を問い、いわば若手の新たな試みを門前払いする中で、ジェンダー研究やジェンダー研究者の直面する困難に理解のあった、竹村和子フェミニズム基金の方々の洞察の深さに依るところが大きいと考えている。このような基金を設立なさり、本事業に助成を決めて下さった竹村和子フェミニズム基金には、多大な感謝を申し上げたい。

なお上映会を終えてみると、全く偶然にもご協力下さった方々の多くが、竹村先生と生前、交流のあった方々であることが分かった。結果的に本助成では、ジェンダー研究に携わる人々が、竹村先生を通じて再びつながり、新たな女性のエンパワーメントを行うこと

になったと言える。また申請者も生前の竹村先生とお会いしたことがあるが、当事は先生と研究関心を共有しているとは考えておらず、後に自らの研究で、このように多大なご貢献を頂くとは思っていなかった。申請者自身、その事実に驚いている。助成期間終了にあたり、竹村先生を偲びつつ、改めて本基金を設立なさった竹村先生のご意志に感謝の意を示したい。